



アペルト14

原田裕規

Waiting for

2021年6月15日(火)～

10月10日(日)

注目作家の原田裕規が2年ぶりとなる新シリーズを発表
初めての3DCGによる映像で、加速する現代社会に向き合う

展覧会名	アペルト14 原田裕規 Waiting for
会期	2021年6月15日(火)～10月10日(日)
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで)
休場日	月曜日(ただし8月9日、9月20日は開場)、8月10日、9月21日
会場	金沢21世紀美術館 長期インスタレーションルーム
料金	無料
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
協力	株式会社Slacktide
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL076-220-2800

本資料に関するお問合せ

金沢21世紀美術館
事業担当: 池田あゆみ 広報担当: 石川聡子・齊藤千絵・落合博晃
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会について

原田裕規（1989年生まれ）は、クリスチャン・ラッセンや心霊写真など、ある時代の視覚文化の中では確かな位置を占めているにもかかわらず、美術史の周縁にある存在を扱ってきました。本展は、作家にとって2年ぶりの新シリーズ「Waiting for」を含む映像インスタレーションによって構成されます。

原田は、2017年より、不用品回収業者などによって回収された引き取り手のない写真を集めはじめました。《One Million Seeings》(2019)では、作家自身が、それらを一枚一枚手に取り、見つめる様子が映し出されます。誰かによってかつて見られ、そして見放され、いずれ記憶からも歴史からも消えていくであろうイメージに対して視線を投げかける行為は、24時間にもおよびます。一方、新作の映像作品《Waiting for》では、オープンワールドゲームの製作に用いられるCGI (Computer-generated imagery) の技術による「100万年前／後の風景」が映し出されます。完全に人工的につくられた世界には、地球上に現存する全ての動物の名前を呼び続ける声が響きわたり、強い不在の感覚が呼び起こされるでしょう。

一見対照的な二作品ですが、いずれにも、膨大な情報と向き合い、それを身体化しようとする人間の姿が記録されています。こうした行為を、作家は「Waiting (待つこと／待ちながら)」という言葉で表現しています。かつてあった存在を見つめ、訪れるかもしれない何かを待つ。それは、出来事の前後に挟まれた空白の時間に身を委ねる行為と言えます。本展は、人々が日々膨大な量の情報を手にすると同時に手放していく現代において、世界と向き合う一つの態度を示す機会となるはずです。



原田裕規《Waiting for》2021 © Yuki Harada

展覧会の特徴

公立美術館での初個展、新シリーズを発表

原田裕規は、武蔵野美術大学在学中より、「ラッセン」や「心霊写真」などをモチーフに、展覧会のキュレーションや書籍編集などの幅広いプロジェクトを展開し、注目を集めてきました。初めての公立美術館での個展となる今回、2017年以降継続的に取り組んできた「心霊写真」シリーズの《One Million Seeings》と、2年ぶりの新シリーズ第一作目となる3D映像作品を組み合わせ、映像インスタレーションとして発表します。本展では、二つの長編映像を数日間にわけて全編上映する予定です。途方もない時間をかけて世界と向き合う作家の身体への意識をご体感ください。

膨大な情報と向き合う作家の身体への意識

原田は2017年より、不用品回収業者などによって回収された引き取り手のない写真を集め始めました。誰がいつどこで撮影したのかも分からないこれらの写真は、「記念写真」や「芸術写真」といったカテゴリーに囲い込まれず、写真の流通網の外部にあります。原田は、このような行き場のない写真群を「心霊写真」と呼びました。

《One Million Seeings》では、24時間にわたり、作家自身がそれらの写真を見続けています。ここには、生身の人間が世界と向き合う一つの態度として、膨大な情報に対峙し、それを身体化しようとする行為が記録されています。

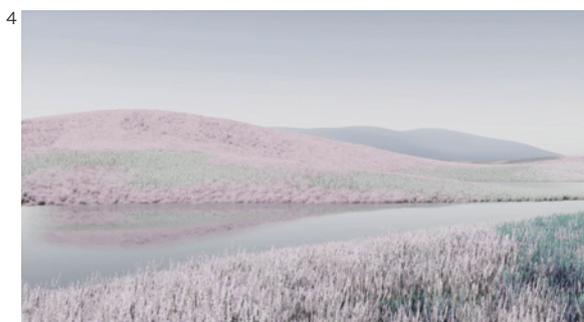


原田裕規《One Million Seeings》2019 © Yuki Harada

CGIにより、「100万年前／後の風景」を立ち上げる

新作の映像作品《Waiting for》は、オープンワールドゲームの製作に用いられるCGI (Computer-generated imagery) により、完全に人工的に作られた架空の風景です。100万年前、あるいは100万年後をイメージして作られた世界は、地形・大気・光源などの情報が現実同様にプログラミングされた「もうひとつの地球」といえます。

その中では、作家自身が30時間以上にわたり、地球上に現存する全ての動物の名前を呼び続けています。人から見た特徴や地名などによって構成される動物の俗名は、それ自体が人と自然の関係性を未来へ伝える「箱舟」のような存在であると作家は捉えています。遠い未来／過去を思わせる世界の中で、全ての動物の名前を呼び続ける声は、私たちには決して目にすることのできない「風景」を想像させることになるでしょう。



3,4.
原田裕規《Waiting for》2021 © Yuki Harada

作家によるコメント

現代の「風景」はどんなものだろうかとずっと考えていた。伝統的な風景画は、高所から見下ろした構図で描かれることが多い。しかし今となっては、単に高所に視点を設定しただけでは、「現代」という時代を俯瞰することはできないだろう。

それでは、その視点はどこに設定されるべきだろうか。そのために試みたことが、《Waiting for》(2021)における「地球上に存在する全ての動物の朗読」と「あらゆる動物がいない光景(=100万年前/後の光景)」のビジュアライズだった。

まずはいくつもの資料をかき集めて、学会や研究機関にも確認を仰ぎながら、膨大な動物の和英俗名をリスト化する作業から始めた。なんとか完成させた2万種以上の俗名リストの朗読には、少なくとも30時間以上を要することもわかった。

それらを俯瞰するひとつの「視点」をつくるために、当初は切れ目なくノンストップで読み上げを行う必要があると考えていた。しかし実際に朗読してみると、疲労、眠気、読み間違えなどにより、朗読は何度も失敗に終わり、最終的には、20時間と10時間の2回にわけて収録した音声を作品にすることにした。

そう決断したのは、このときに人間の身体の有限性について改めて強く実感させられたからだった。この朗読では、まるでコップの水が溢れるように、多すぎる情報や身体的な負荷など、演る者にとっても観る者にとっても、常に何か手が余る状態が続いている。この何か溢れた状態にこそ、ちっぽけな人間には推し量ることのできない「風景」と呼ぶべき何か立ち上がるのを実感したのだ。

それと同じ意味で、《One Million Seeings》(2019)でも常に何か溢れている。

この作品で行った、24時間にわたり延々と写真を見続けるパフォーマンスは、体力・認知ともに人間の限界を越えるものだった。次々と現れる詳細不明の写真を見続ける作業は、イメージを人間の側に引き寄せて都合よく解釈する作業ではなく、いわば、人間の身体をイメージの側に引き寄せて新たな関係性を築こうとする作業である。

人間(=身体)ではなく、人間以外(=イメージ)の視点に立つこと。それがこのふたつの作品が共有する倫理であり、現代の風景を出現させるために必要な態度であると思う。

「Waiting for」という展覧会/作品タイトルには、人間の想像力を超えた空間的・時間的広がりに対して、作者が手綱を握ろうとするのではなく、善悪も清濁も含んだところで待ち、その有り様を最後まで見届けたいという思いを込めている。

原田裕規

作家プロフィール

原田裕規(はらだ ゆうき)

1989年山口県生まれ。アーティスト。
 社会のなかで広く認知されている視覚文化をモチーフに、人間の身体・認知・感情的な限界に挑みながら、現代における「風景」が立ち上がるビューポイントを模索している。バブル期に一世を風靡したラッセン、日本でオカルトブームを牽引した心霊写真、オープンワールドゲームなどに用いられるCGIに着目しながら、実写映像、パフォーマンス、CGI、キュレーション、書籍など、多岐にわたる表現活動を行っている。主な個展に「One Million Seeings」(KEN NAKAHASHI, 2019年)、編著書に『ラッセンとは何だったのか?』(フィルムアート社、2013年)など。東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。

<http://www.haradayuki.com>



関連プログラム

アーティスト・トーク

日時：2021年5月29日(土) 14:00~15:30

場所：金沢21世紀美術館 レクチャーホール(予定)

料金：無料

※予約不要

※延期となりました。開催日が決定しましたら美術館ウェブサイト、Twitter等でお知らせします。

「アペルト」シリーズとは

「アペルト」は、若手作家を中心に個展形式で紹介する展覧会のシリーズです。金沢21世紀美術館は世界の「現在」とともに生きる美術館として、今まさに起こりつつある新しい動向に目を向けています。作家とキュレーターが作品発表の機会を共に創出し、未来の創造への橋渡しをします。国籍や表現方法を問わず、これまで美術館での個展や主要なグループ展への参加経験は少ないが、個展開催に十分な制作意欲を持ち、アペルト実施以後のさらなる飛躍が期待できる作家を紹介していくものです。

※「アペルト (aperto)」は、イタリア語で『開くこと』の意味。

広報用画像

画像1~5を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。

画像お申し込みフォーム▶ https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。